

## 1 主題設定の理由

図1は、本校の全校児童生徒数の推移をグラフ化したものである。島を取り巻く状況は年々厳しさを増し、住民が島を離れることを余儀なくされ、児童生徒数が激減している。人やモノなど、学校教育の質を維持するためには、児童生徒数の確保が必要である。しかし、何も手を打たなければ児童生徒減に歯止めをかけることは難しい。

そのための一方策として、島では行政の支援を受け離島留学制度を始めたところであるが、離島留学者数を伸ばすことが大きな課題となっており、学校と地域が協働して取り組んでいくことが求められている。

離島における学校の使命として、学校が島の文化の中心でなければならない。学校を存続させることが、島の活性化につながる。すなわち、島とともに生きる学校とならなければならない。

そこで、学校全体で組織的・計画的に地域活性化の取組に参画するとともに、離島留学者数を増やし離島留学制度の継続と安定化を図ることを目標とした。

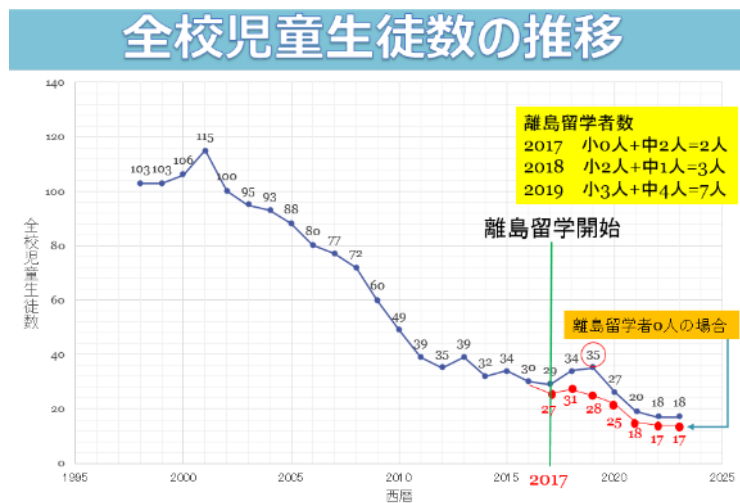


図1 全校児童生徒数の推移

## 2 研究の目標

学校全体で組織的・計画的に地域活性化の取組に参画し、離島留学者数の増加と離島留学制度の継続と安定化を図る。

## 3 研究の内容

(1) ~ (3) の活動を展開することで、離島留学制度の継続と安定化を図る。

- (1) 児童生徒の基礎学力向上及び発信力の育成
- (2) 文化の中心としての活動
- (3) 離島留学制度事務局との連携

## 4 研究の方法

### (1) 児童生徒の基礎学力向上及び発信力の育成について

児童生徒の主体的に生きる力、外に発信できる力を育み、将来、島を活性化させていく姿勢を醸成する。

### (2) 文化の中心としての活動について

学校は、児童生徒の教育を担うとともに文化の中心として活動する。

### (3) 離島留学制度事務局との連携について

学校全体で組織的・計画的に地域活性化の取組に参画するために、離島留学制度事務局との連携を強化する。

## 5 研究の実際

### (1) 児童生徒の基礎学力向上及び発信力の育成について

基礎学力の向上を図る手立てとして学習習慣の定着を図ることを目途に、小学校、中学校において、校種に適した取組を行った。中学校では、学活ノート及び家庭学習の手引きを刷新するとともに学習会を設定、小学校では、学習マナーの確認及び長期休業中の学習会を設定することとした。

中学校においては、家庭学習の充実を図るためにも学習習慣の定着化が先決であると考え、部活動の一部の時間を学習会に充て、顧問が適宜指導することとした。本校は、複数顧問制をとっているため、学習指導を中心にする顧問と実技指導を中心に指導する顧問とある程度の分担が可能である。また、夏季休業中においては、空調設備が整っている特別教室を活用し、「まだら寺子屋」を開講し、顧問が適宜指導しつつ自主学習を行わせた。

小学校においては、課業日には、家庭教育力の伸張を期待し学習会の設定はしていない。夏季休業中においては、継続的に受け継がれてきた「サマースクール」を3日間設定するとともに、中学校主体の「まだら寺子屋」に高学年児童を自主参加させ、学ぶ意欲を刺激した。なお、低中学年については、保護者同伴による参加を許可し、家庭教育力の伸張も期待した。

発信力の育成の手立てとして思考力・判断力・表現力を高める学びを研究した。平成30年度は、小中全学年において、主体的・対話的で深い学びを深める時間として設定している「あいタイム」の効率よい運用を図ることを目途に各学年及び各教科における位置付けを明確化することとした。これまで、「あいタイム」の設定は、各学年や各教科に任されていた。「あいタイム」を設定するものの何のための時間なのかが不明瞭な場合もあったという。そこで個人での思考の後に班（ペア、グループ、全体）での思考を行うことにより言語活動を重視することとした。また、「チャレンジレベル（ルーブリック評価）」を導入し、子どもたちへの意識付けを図ることとした。

令和元年度は、教科書を読んで内容を理解できる児童生徒の育成を目指した授業の工夫に取り組んでいる。リーディングスキルテストを導入し、基礎的な「読む」力を測り知識と技能の習得において状況に合わせた適切な情報処理能力を発揮させることを期待している。

### (2) 文化の中心としての活動について

学校が文化の中心であるために、各種文化的行事の開催と学校図書館の開放に取り組んだ。文化的行事として、学校の文化祭や学習発表会における島民のギター演奏、プロ音楽家によるコンサート、親子映画会を開催した。

本校図書館は、従前から島民に開放することを目途として大人向けの本も揃えられていたが、周知不足も否めず来校者がいない状況であった。そこで、学校だよりやホームページでの周知とともに、図書館祭を開催し、保護者に栞づくり講習会やアロマセラピー講習会を依頼した。

### (3) 離島留学制度事務局との連携について

離島留学制度は、行政の支援を受けて始められたものであるが、離島留学者数を伸ばすことが大きな課題となっている。制度の継続と安定化のためには、学校と地域が協働して取り組んでいく必要がある。そこで、馬渡島離島留学実行委員会と連携し、月ごとに魅力ある行事を離島留学者に提供することとした（表1）。

表1 離島留学者への提供行事

月	行事	月	行事
4月	新入生・離島留学者歓迎遠足	10月	馬渡くんち de おみこし体験
5月	地域とともにある体育祭	11月	地域とともにある文化祭
6月	シマコンサート	12月	クリスマス集会
7月	ふぐ稚魚放流体験、七夕集会	1月	立志式
8月	離島卓球交流会、まだらでシネマ	2月	まだらん発表会、まだらんコンサート
9月	太陽の軌跡・星空学習会	3月	離島留学者お別れ会

特に、離島卓球交流会については、これまで行政主導で開催されていた離島交流事業を総合的な学習の時間を活用し生徒に企画させることとした。本校卓球部が、県内強豪校の一つである利を生かし、卓球を核として他校の生徒や島外の方との交流の場を設けることで、外部からの刺激を受けるとともに生徒の企画力の向上をねらった。

## 6 研究の成果

### (1) 児童生徒の基礎学力向上及び発信力の育成について

図2は、中学校における1学期の評定結果を平成28年度と本年度と比較したものである。全教科の5段階評定が向上し、平均で0.7ポイント向上している。このことは、「島の学校で学力が伸びるのか？」という不安を解消することにつながるものと期待している。

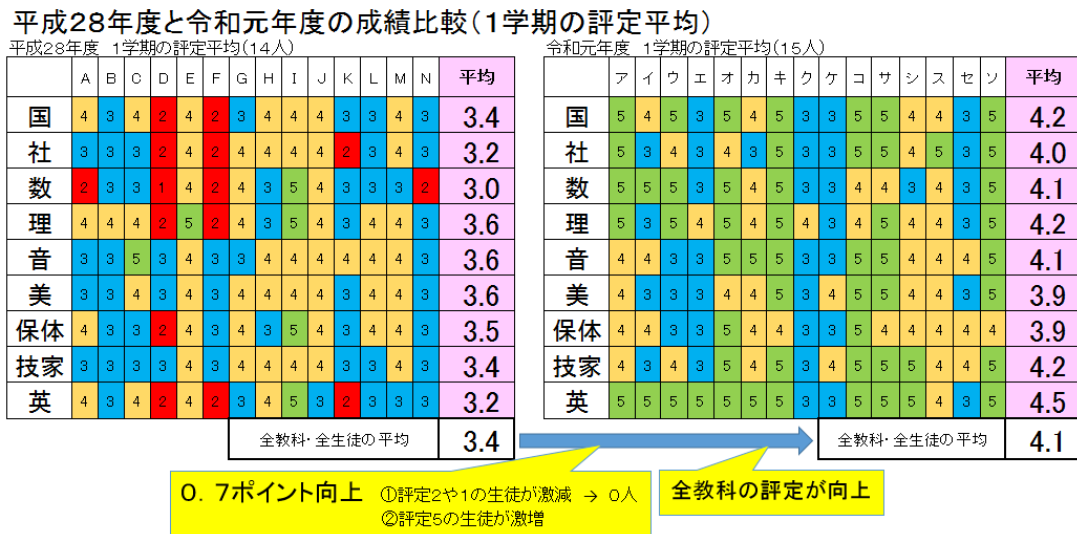


図2 学力向上の状況(評定の変化)

「あいタイム」がグループで行う必然性のある言語活動になるような課題設定を行うことで、より明確に位置付けることができるようになった。児童生徒が、順序立てて説明したり自分の考えを積極的に提示したりする姿勢が見られた。

チャレンジレベル(ルーブリック評価)導入については、子どもの目標と教師の目標が一致することで自己評価と教師評価のずれが少なくなり、子どもたちが納得できるデータを基にした学期末の評価評定を行うことができている。この取組には、中学生の8割が好意的に考えており、ネーミングを単にルーブリックとせず、チャレンジレベルとしたことも、親しみを持って一つの要因と考えている。

### (2) 文化の中心としての活動について

島内においては、島民が練習の成果を発表する機会はほとんどない。そこで、学校が発表する場を提供する必要があると考え、文化祭や学習発表会において、ギターや二胡、琴などを演奏する島内在住の青年と、ピアノやギターを弾く離島留学者の保護者でセッションしてもらうこととした。幕間には、離島留学者がピアノの独奏を行う等、文化的な刺激を与えてくれた。

また、シマコンサート(図3)やまだらでシネマ(図4)の取組は、日頃、島内では聴くことができないプロの音楽家の生演奏を間近で鑑賞できる場や、島内にない映画館を手軽に構築し、映画が持つメッセージや価値観の親子で共有できる場となっている。

島には、コンサート会場や映画館はないが、親子、おじいちゃんやおばあちゃんと孫、教職員もみんな一緒に、アットホーム感覚で文化芸術を楽しめるのが魅力である。こうした取組を行うことこそ「学校は文化の中心である」を自負できるものととらえている。

図3 シマコンサート広報資料

図4 まだらでシネマ広報資料

図5 離島卓球交流会広報資料

### (3) 離島留学制度事務局との連携について

全国各地で数多実施されている離島留学制度の中から、離島留学者を本島に呼び寄せるためには、我々のハードルを上げて島の魅力をアピールする必要がある。離島留学者に提供した行事は、従来からの本校行事を拡充したものや新たに企画したものであるが、本校だけで取り組めるものではない。馬渡島離島留学実行委員会と連携することで魅力ある行事を離島留学者に提供することができている。

特に、生徒たちに企画させた離島卓球交流会は、卓球の試合だけでなく、釣り体験も企画する等、生徒たちの柔軟な発想により、県内外から子どもたち25名を含め約100名が参加し盛況に終了した。島民を巻き込んだ形で運営することにより、島の活性化だけでなく、島の利益確保にも貢献できるものになる。これまで、生徒たちは、島の課題については認識していたが、自らその解決に向けての方法を設定することがなかった。この取組を通して、生徒たちは現状の課題を解決できる力があることを実感し、社会参画意識を高めることができたものととらえている。

また、行政の取組として、首都圏や福岡市等において離島留学制度説明会が定期的開催されている(図6)。その機会を逃さず、離島留学者の生の声や馬渡島イメージビデオを制作し、馬渡島の良さをアピールすることができた。

図6 離島留学説明会広報資料

## 7 まとめ

これらの取組を行い、離島留学人数の倍増とともに学校や島の活性化を実感している。離島留学人数は、1年目2名、2年目3名、3年目7名と増加傾向にある。特に顕著であるのは、先に留学している児童生徒の兄や妹が離島留学を希望してくることである。このことは、本校の取組が評価されている表れであるにとらえている。

今後も、離島留学制度の継続と安定化を図るため、幅広い広報活動を行うとともに、島の魅力度を上げる取組を打ち出す等、「島とともに生きる学校!」を目指して、たゆまぬ努力を行っていく所存である。